

Title	本邦室町時代禅林文学における継承と展開
Author(s)	中本, 大
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/40108">https://hdl.handle.net/11094/40108</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a>〉</a> をご参照ください。

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	中本大
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第12893号
学位授与年月日	平成9年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科国文学専攻
学位論文名	本邦室町時代禅林文学における継承と展開
論文審査委員	(主査) 教授 伊井 春樹  (副査) 教授 後藤 昭雄    教授 天野 文雄    助教授 荒木 浩

### 論文内容の要旨

本論文は、室町時代前期、とくに応永・永享期に活躍した、惟肖得巖と江西龍派を中心に、禅林文学の継承と展開にかかわる問題を考察したものである。従来、とかく五山文学史論においては、中巖円月・義堂周信・絶海中津といった、鎌倉後期から南北朝期の禅僧たちによって築かれた五山文学を最高峰とし、以後はそれを継承するにすぎなく、独自の文学を形成するにはいたらなかったとする評価が一般的であった。近年、新しい視点から五山文学の見直しが求められており、成果も生み出されているが、本論文はそのような流れの一つとして位置づけられるようで、後世「叢林四絶」と敬慕された禅学のうち、惟肖得巖と江西龍派との文学史的意義や系譜を詳細に明らかにした内容である。とりわけ、大陸の文学を摂取して生み出された五山文学の、日本文学史に占める意義を究明するだけでなく、中国文壇の同時代的動向や、本邦の歌壇・連歌壇・画壇・能楽界といった、さまざまな文芸・芸術領域との交流関係の親疎によって、詩題定着の契機がそれぞれ異なる点に五山禅林文学の特質があることを論証していく。

論文の構成は、前後に序章と終章を置き、本論は三章六節の、400字詰原稿用紙にしておよそ440枚ばかりからなる。第一章「惟肖得巖の詩興とその継承」では、惟肖にとくに注目し、彼を嚆矢とする詩題の定着や、その詩題の他領域への影響を考察することにより、禅林における特異な役割を検証していく。

第一節「本邦禅林の「韓王堂雪」詩における李煜詞の受容をめぐる―「五山文学と填詞」続貂―」では、中国元代の総集『皇元風雅』後集所収、「十雪題詠」連作の冒頭に位置する「韓王堂雪」詩への惟肖の追和詩の性格を考察する。惟肖が次韻した李草窗の「韓王堂雪」は、李煜による亡国の君主の運命を詠じた作が用いられる。しかし、惟肖の詩には、太祖の太平を謳歌する祝賀に終始した内容となっており、李煜詩に表現されていた非情な運命の内容は詠まれていない。惟肖が原典の填詞を知らなかったわけではなく、左遷によって長楽寺の住持となっている身にとっては、意図的に亡国の悲嘆に同情する姿勢を排したことによる。これ以後の「韓王堂雪」詩は、『皇元風雅』原典の李煜詞を充分に生かすことなく、惟肖によって形成された典型的な詠作が主流を占めてくるようになる。

第二節「本邦禅林における「李及」像」は、『皇元風雅』所収「十雪題詠」中の惟肖詠「李及郊雪」に関するもので、五山禅林において独自に獲得されるにいたった詩材の様相を論じる。杭州大夫であった李及の故事が、宋初の隱逸詩人であった林逋を詠じる際の題材として五山禅林では用いられるが、惟肖と同時代の西胤俊承にも「李及郊雪」の七絶があり、この二人の周辺から、講説の場を通じて、建仁寺靈泉院友社の瑞溪周鳳や南江宗沅に伝えられていたとする。以後の禅林においても、李及の名は林逋とともに語り継がれ、高潔な人物として享受されるが、その源流

には惟肖の「十雪題詠」が存在していた。

第三節「本邦禅林における橘叟説話の受容について」は、唐代の伝奇である「橋中仙」の説話が『竹林抄』の付句に見られ、『竹間』等の古注にも指摘されるが、これは五山文壇における享受が、連歌壇で継承されるにいたったことによる。中国の宋末には、すでに橘叟説話は商山四皓に付会して一般化し、元末明初になると画題の隆盛とともに詩作に用いられるようになるが、その詩壇の動向を敏感に受けとめたのが留学僧の絶海中津などであった。大陸での詩作や画題の隆盛を承け、日本で「四皓困碁図」題の詩作を普及させたのが惟肖得巖である。惟肖は橘叟の詩題を確立し、後世の五山禅林へ大きな影響を与えたともいえる。このように、室町時代前期の禅林文壇において、惟肖が新しい詩材の獲得と定着に関して、もっとも大きな影響力を持った作家であったといえる。その惟肖について、連歌師の心敬は『ひとりごと』において詩聯句の名匠と評し、「日本にて此二、三百年の此かた並べて云ふべき人なしと也」と称賛する。このような評価があることは、心敬及びその周辺と五山禅林との結びつきがあったことを予想させ、橘叟説話が連歌の世界へもたらされる契機となったものと思われる。なお、五山では惟肖以後、「四皓困碁図」としてすっかり陳套化し、他の文芸ジャンルにも受容されていった。

第二章「江西龍派の詩風とその展開」では、門下の学徒をして「詩尊宿」と言わしめ、艶麗な作風によって一家をなした江西龍派の詩風を検討するとともに、彼に連なる建仁寺靈泉院友社の詩僧の偉業についても考察する。また、杜牧詩や『三体詩』等の講説に大きな足跡を残した江西の古典解釈の方法とともに、和歌の利用なども含めた禅林文芸の多様性の一端を明らかにしていく。

第一節「多情」攷—江西龍派詩に見える詩語の解釈をめぐって—は、江西の別集に頻出する「多情」の解釈を端緒に、その詩語が、江西以前の古典解釈とは異なる、彼の個性の表出した表現であることを指摘する。「多情」のことは平安時代にすでに大陸からもたらされ、白居易の影響もあって「多恨」「多感」「多愁」に通じる表現として受容されてきた。しかし、江西が「多情」を恋情と解する独自の詩語解釈を示すことによって艶詩としての位置づけとなり、それを継承したのが希世靈彦であった。江西が解釈の根拠としたのは、五山で重用されていた『韻府群玉』での、「多情」が「淫情」を示す用例としていることによっており、その詩語が建仁寺靈泉院周辺で継承されていく。『三体詩幻雲抄』に引用される、杜牧詩「江南春」絶句の江西の解釈によると、杜牧の艶聞を眼目とする説を示す。江西にとって、杜牧は「多情」と表現する対象であったわけで、その解釈を通じて江西の詩作に多用される「多情」も理解されてくるのである。『三体詩』の江西による杜牧詩の講説により、五山における杜牧像は社会性や史家としての側面は欠落し、「淫色」の姿を描くことに類型化していった。このように、禅林において、新しい詩語の獲得と継承には、講説の場での江西龍派の果たした役割が大きかったことを示しているであろう。晩唐の詩人杜牧への共感と、「多情」としての人物像は、江西の門生で、後に五山を離れた一休宗純の詩作にもっとも顕著に継承され、結実していくことになる。

第二節「一休宗純の杜牧賛について—建仁寺友社の影響と継承—」は、一休の『狂雲集』中の杜牧賛の詩語について、その典故を手がかりにしながら、五山禅林における杜牧像の形成について論じる。一休の「賛杜牧」七絶の典拠詩は「華清宮三十韻」の五言古詩だが、この書は当時入手が困難だったため、それを引用した簡便な書として編まれた『詩人玉屑』に拠ったのであろう。この書は、詩話を中心にして、史書・小説などから詩作の指針となる言説を抜き出して編纂しており、実作の手軽な手引き書として五山では広く読まれていた。当時においては、杜牧は李白や杜甫よりも高く評価されていたわけではなく、中晩唐の群小詩人の一人の扱いにしかすぎなかったものの、一休がとくにとりあげて詩作したことは注目すべきである。杜牧詩に親しんだのは、義堂周信や絶海中津であり、その薫陶を承けた江西龍派など建仁寺友社の詩僧たちであった。とりわけ杜牧集享受は江西龍派によって一応の集成がなされ、杜牧像は「風流」の人物として捉えられた。一休が杜牧を好んだのは、江西龍派に学び、五山から出奔して一休に兄事した南江宗沅とのかかわりによるのであろう。五山では画一的な杜牧像が継承されていくが、一休はより豊かな姿として造型し、独自の作風を形成したといえる。ただ、このような理解の背景には建仁寺靈泉院友社の江西龍派や南江宗沅などとの交渉が存し、そこでの杜牧像がより拡大されたわけで、一休も五山文学史との大きなかかわりがあったと知られるであろう。

第三節「禅僧と和歌—『三体詩幻雲抄』に見る和歌記述—」は、『三体詩』の注釈史において、もっとも尊重される江西の説は、月舟寿桂『三体詩幻雲抄』に収載されるが、それによるとしばしば和歌を証例とする解釈が引用され

る。正当な漢籍を題材とし、かつ師説を披露する場でもある講説において、他の文学領域に対する禅僧の興味を反映し、新たな訓みや解釈、さらには『伊勢物語』にかかわる荒唐無稽ともいべき説話までも生成するといった状況を考証する。このような講説の場での漢籍以外の知識の展開というのは、中世における学問体系を考える上での大きな視点になるであろう。

第三章「鉄拐仙」像の受容と定着」では、詩題の受容や定着に関与した特定の人物の業績を称揚するのではなく、異なる位相の契機によって受容された詩題が、文壇に定着するための経緯を考察する。即ち、中国の詩文壇の評価とは必ずしも一致しない、本邦独自の価値観に拠って受け入れられた題材のあることを、「鉄拐仙」を例に検証する。結論的には、『道蔵』等に収められる各種の仙伝には見いだせない「鉄拐仙」像が本邦に定着するにいたった背景には、中国元代の雜劇等の詩章はなんらの影響力を持たず、むしろ、中国元代の画家、顔輝筆の画像の喚起するイメージがあまりにも強かったため、画題に触発されるかたちで、後に詩題として定着したことを論じていく。

室町期物語の『不老不死つゞれの錦』では、鉄拐はくろがねの拐（かせづえ）を持ち、高い巖に腰をかけ、薬の袋を結び、虚空に向かって長大息する姿として受容される。このような鉄拐仙像は、中国の正統な仙伝などに見ることができないが、日本ではむしろ『文明本節用集』などに指摘される、元代の画人顔輝の鉄拐仙図が大きな影響を与えたのであろう。この画像は日本に伝えられ、現存する作品でもある。五山禅林では賛詩も付されるようになり、狩野派等の重要な画材となり、室町後期以降の文学作品にまで登場するようになる。いわば、鉄拐仙は画題が先行し、後に詩題に取り込まれるという過程を経て定着したといえる。伝統的な文学観からすると、価値が高いとはいいがたい、正統な典籍によらないこうした作品が、希世靈彦や横川景三、景徐周麟等の五山学僧の別集に収められていることは、五山文学ないし禅林文壇を知る上においては大きな意味を持っているといえよう。

終章では、これまで論じた内容を総括し、本論文の研究上の位置づけと意義、さらには今後の展望についてあらためて触れる。五山文学研究は、大陸文学の移入だけを眼目とした、禅林の閉じられた世界を考察の対象にはできなく、歌壇・連歌壇、さらには画壇・能楽界といったさまざまな領域との、各年代ごとの交流関係の親疎によって、詩題定着の契機を検証していくことが必要になってくる。この方法の重要性はさらに推進すべきであり、これによる成果の達成により中世文学史も書き換えが必要になるであろう。むしろその視点を持つことが、「五山文学史」の構築にもつながってくるはずであると論じる。

### 論文審査の結果の要旨

臨濟宗の五つの大寺院が定められたのが鎌倉時代末期、それを五山と称し、鎌倉だけではなく京都にも設置され、これらの諸寺を頂点とした制度が確立したのが南北朝末期から室町時代初期であった。三段階ある寺格の最上位の五山に、中世漢詩文のすぐれた禅僧が輩出し、そこで生み出された作品を五山文学と呼ぶ。ただ、これには五山制度内の僧たちの漢詩文に限定する狭義と、一休なども含めた五山以外の禅僧の作品をも称する広義とが存するが、筆者はより広い視野のもとに五山文学を論じていこうとする立場にある。

五山文学の隆盛期は南北朝から室町前期にかけてであり、留学する僧も多く、大陸との盛んな交流のもとに、中巖円月、義堂周信、絶海中津といったすぐれた学僧たちによって膨大な数の作品が作られていった。応仁の乱を境とする室町後期になると、横川景三、万里集九、景徐周麟、月舟寿桂などといった詩僧が出現して数多くの漢詩集が編纂されていくものの、庇護をしていた室町幕府の崩壊とともに、やがて五山文学も衰退していくことになる。このような五山文学史の概観において、室町初期に位置する禅林における文学活動の評価は、前代の継承にすぎなく、独自性はあまりないとし、特異な存在の一休宗純を除くと、それほど注目されることはなかった。筆者はむしろその時代に焦点を当て、江西龍派を筆頭とする建仁寺靈泉院友社の禅僧による作品の特色を分析し、新たな詩題の獲得に努め、禅林だけではなく広く文壇にまで定着させた惟肖得巖の作品に迫る。たんに個人的な作品の追究に終始するのではなく、多人数の参加のもとでの講説や聯句会の場で語られた内容の意義を明らかにし、そこから同時代の歌壇や連歌壇、さらには画壇とのつながりにまでいたる。

それまでの五山文学は、禅宗という大陸の宗教を学ぶために、習得した語学力も文章力も宋や元の人々にひけをと

らない力をそなえていたに違いなく、そのような学僧たちによって生まれた漢詩文は、中国人と変わらぬ作風と作品を残すにいたったとして評価されてきた。しかし、この時代になると日本の風土に定着し、詩題も内容も大陸とは異なってくるのは当然で、和歌や連歌とのかかわりも、それだけ五山文壇の多様性を示すことを意味してくる。中国文壇の動向を目にしながらも、日本のさまざまなジャンルとの交流の親疎により、五山文学は独自の領域を形成していったはずで、その特質を明らかにするとともに、中世文学における五山文学史の書き換えをも意図したのが、本論文の主旨でもある。

五山文学というのは、国文学の歴史においてはきわめて特異な存在として扱われ、わずかなページが割かれて説明されるに過ぎなかった。平安朝の漢詩文は近年活発に研究も進展し、和歌や物語文学との交流も盛んになされ、研究者人口も増大しており、近世の漢詩文にしてもその重要性は早くから認識されて文学史における確かな地歩も確保している。それらに比して、相対的に評価されてこなかったのが五山文学で、その作品はかなり知られていながらも、研究となるといわば傍流の領域としてみなされる傾向にあった。しかし、当然のことながら、文学作品として扱われるようになり、個々の作品の解説、作品の史的意義、禅僧たちの動向を背景にした展開など、ようやく研究者の注目するところとなってきた。そのような流れを推進する一人に、筆者も位置づけられており、新進の学徒として認められてきているのが現状である。しかも、長期間にわたる五山文学の中でも、人々のあまり手を染めなかった室町初期の人と作品に焦点を当て、「大陸文学の移入」という視点からだけではなく、禅林における漢詩文の成立とその背景をさぐりながら、和歌、連歌、画題、能（謡曲）などとの関連を求め、主流とされてきた文学の動向と重ねることによって、五山文学の時代的な意義を求めていこうとしたところに、斬新な成果を得ることができたといえよう。

第一章では惟肖得巖を取り上げ、彼が定着させた詩題や他の領域への影響まで考察することによって、禅林における役割を明らかにしていく。とりわけ、五山での「橋中仙」説話が連歌の世界にまで用いられていた指摘は重要で、禅林文学が孤立した存在ではなかったことの証左でもあろう。連歌壇や歌壇と五山とは相互に隔絶していたわけではなく、文学として交流があり、影響もしあっていたとなると、そのような視野をもって連歌や和歌も今後は考察していく必要も生じてくるであろう。第二章では江西龍派を検討の対象とし、多様な禅の語彙を獲得した禅林の学僧は、文学的な詩作に用いることばに関してはどうのような過程で受容したのかを大きなテーマとして詳細な分析を進めていく。「多情」といったことばの概念の変遷、建仁寺靈泉院友社の存在の意義、またここでも五山と和歌とのかかわりを『三体詩幻雲抄』から摘出していく。第一章・第二章と視点を換え、画壇とのかかわりを求めたのが第三章の「鉄拐仙」像の受容と定着で、室町期物語から近世の近松や西鶴の作品にまで視野を広げて論じていく、研究方法の大きさをも示している。

筆者の研究方法は、徹底した資料主義とも称すべき態度で、論の展開に必要な五山の資料を次々と例示し、中国の広範囲な作品にも及び、さらに和歌や連歌、散文の例示にまで手を緩めることがない。該博な知識と、丹念な作品の読みにより、まさにもつれた糸をほぐすように、当時の詩語の形成や詩題の伝播を解明してみせる。ただ、難をいえば、大きな五山文学史を視野に入れてはいるものの、本論そのものはまだ限定された部分を論じているにすぎなく、体系的なまとまりにまではいたっていない。資料の制約にもよるのであろうが、今後さらにその方向で努力を積んでほしく思う。しかし、本論はきわめて刺激的で、意欲的な内容だけに、学界に裨益するところは大きいものがあるであろう。本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位に充分ふさわしい価値を有するものと認定する。